

# シャーロット・ブロンテとギヤスケル — 社会小説としての『シャーロット・ブロンテの生涯』 —

芦澤久江

## 1 はじめに

エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) の描いた『シャーロット・ブロンテの生涯』 (*The Life of Charlotte Brontë*, 1857) は長い間多くの読者によって愛読されてきた。ギヤスケルはシャーロット (Charlotte Brontë, 1816-55) を作家として賞讃するのではなく、彼女の家庭的で女性らしい面を強調した。この伝記に描かれたシャーロット像はまさにギヤスケルの価値観に基づいた一面的なものにすぎなかった。その結果、ジュリエット・バーカー (Juliet Barker) などの研究者によって、ギヤスケルの伝記には多くの虚偽があると批判されている。<sup>1</sup> 確かにたとえそうだったとしても、この伝記がイギリス文学史上、偉大な伝記であることは疑いない。しかしこの作品は伝記としてだけでなく、社会小説としての役割も担っているとわたしには思われる。そこで、シャーロットとギヤスケルを比較しながらギヤスケルの価値観を明らかにするとともに、『シャーロット・ブロンテの生涯』というテキストが当時の中流階級の子女たちの現状を訴える社会小説の側面を持っていたということを考察したい。

## 2 二人の価値観 — 作家、女性

エリザベス・ギヤスケルとシャーロット・ブロンテは 1850 年 8 月 20 日 (火)、サー・ジェイムズ・ケイ＝シャトルワース (Sir James Kay=Shuttleworth, 1804-77) の仲介により、ウィンダミア湖近くのケイ＝シャトルワースの別荘ではじめて対面し、その後 1855 年 3 月 31 日 (土) シャーロットが亡くなるまで、二人の友情は続いた。しかし興味深いことに、彼女たちは外見をはじめ、ものの考え方、政治的見解、宗教的信念に至るまでことごとく異なっていた。このことはギヤスケルが描いたシャーロット像を考えるうえでたいへん重要なことである。初対面のシャーロットについてギヤスケルは印象を次のように述べている。

She is,(as she calls herself) *undeveloped*; thin and more than ½ a head shorter than I, soft brown hair not so dark as mine; eyes (very good and expressive looking straight & open at you) of the same colour, a reddish face: large mouth & many teeth gone; altogether *plain*; the forehead square, broad, and *rather* overhanging.

(*Letters* 123)

ギヤスケルはシャーロットの頭半分以上背が高く、シャーロットを見下ろしていた。これは潜在的にギヤスケルに優越感を与えたであろう。また初対面でのシャーロットは『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*,1847)を書いた作者とは思えないほど内気でおどおどした態度をとっていた (*Letters* 123)。ギヤスケルはこのような小柄で内気なシャーロットを見て同情を寄せ、この印象のちに『シャーロット・ブロンテの生涯』で描かれるシャーロット像に大きな影響を与えることになったのである。

外見だけでなく、二人の考え方はさまざまな点で大きく異なっていた。シャーロットの政治的見解はトーリー党で貴族主義であり、宗教はいうまでもなくイギリス国教会だったのに対して、ギヤスケルの政治的見解はシャーロットに言わせれば「民主主義」であり (*Letters* 129)、宗教は非国教徒のユニテリアン派に属していた。文学的嗜好においてもテニソン (*Alfred Tennyson*,1809-92) に対する考えで二人は口論となった (*Letters* 129)。シャーロットはテニソンの ‘*In Memoriam*’ (1850) について、友人が亡くなった後で、あのような詩は書けないはずだと考え、テニソンには批判的だった (*Letters* 129)。

とくに、何よりも二人の間で重要な相違点は女性、作家に対する考え方であった。ギヤスケルは妻として、母として家庭での務めを果たせることが幸福だと感じ、神に感謝さえしている。

I am always glad and thankful to Him that I am a wife and a mother and that I am so happy in the performance of those clear and defined duties. (*Letters* 117-18)

しかしギヤスケルは妻、母親であると同時に、作家でもあった。この家庭と仕事の両立についてギヤスケルはキャサリン・ウィンクワース (*Catherine Winkworth*,

1827-78) に次のように述べている。

One thing is pretty clear, *Women*, (sic) must give up living an artist's life, if home duties are to be paramount. It is different with men, whose home duties are so small a part of their life. However we are talking of women. (*Letters* 106)

ギヤスケルは、女性にとって家庭での役目が第一義的であり、作家という職業がこれを妨げるべきものではないと考えている。これはまさに当時のヴィクトリア朝時代の人々が信じていた女性の役割であり、きわめて典型的な考え方であった。サウジー (Robert Southey, 1774-1843) はシャーロットに宛てて次のように書いている。

Literature cannot be the business of a woman's life, and it ought not to be. The more she engaged in her proper duties, the less leisure will she have for it, even as an accomplishment and a recreation. (*Life* 173)

サウジーもギヤスケルと同様に、女性が文学を生業とするべきではないと述べ、女性の領分がいかなるものであるかをシャーロットに切々と述べている。さらにギヤスケルは彼女にとって「ものを書く」ということがどのようなことなのか述べている。

I am sure it is healthy for them to have the refuge of the hidden world of Art to shelter themselves in when too much pressed on by daily small Lilliputian arrows of peddling cares; it keeps them from being morbid. . . and soothes them with its peace. I have felt this in writing. . . (*Letters* 106)

ギヤスケルにとって「ものを書く」という行為は家事の合間の癒しのようなものであった。つまりギヤスケルは作品を描くことに没頭することで日々のストレスから解放されると感じていたのである。

ギヤスケルとは対照的に、シャーロットは女性の役割について革新的な考えを

もっていた。『ジェイン・エア』でよく知られているように、シャーロットは能力がある女性なら家庭に縛られず、その才能を遺憾なく発揮すべきであると声高に主張していた(141)。とくにシャーロットは1850年代「余った女性」たちをどうしたらいいかという問題に対しウィリアムズ(W. S. Williams, 1800-75)に宛てて手紙を書いている(Smith 2:60)。シャーロットは女性に仕事の機会を増やすよう、たとえば医者、弁護士、芸術家、作家などの職業につけるようにすべきだと提言している(Smith 2:60)。

シャーロットは実人生においても、家庭教師を務めるだけでなく、塾の経営を計画したり、詩集の出版などを試みたりしながら、自立する道を模索していた。さまざまな試行錯誤を通して、シャーロットが最終的に辿り着いたのは小説家という職業だったのである。

一方ギヤスケルは前述したように、女性の務めは家庭での仕事だと信じていたので、そうした価値観は彼女の作品にも投影されている。『メアリ・バートン』(*Mary Barton*, 1848)や『ルース』(*Ruth*, 1853)において主人公たちはお針子や看護婦という職業に就いている。しかしここでは女性たちの自立問題よりもお針子たちの悲惨な状況が映し出され、読者はただ、彼女たちの悲惨な運命に同情するよう促される。すなわちギヤスケルの作品においては、そうした貧しい女性たちが救われるのは職業をもつことによってではなく、周りの人々の善意によってであるということが暗示されているのである。

ギヤスケルの女性や仕事に対する考え方は、すでに述べたようにヴィクトリア朝時代の人々の価値観そのものであった。それゆえギヤスケルは社会における自分自身の立場を良く認識し、そこから大きく逸脱するようなことはしなかった。シャーロットの作品と自分の作品を比べて、ギヤスケルは次のように述べている。

The difference between Miss Brontë and me is that she puts all her naughtiness into her books, and I put all my goodness. I am sure she works off a great deal that is *morbid* into her writing, and *out of* her life; and my books are so far better than I am that I often feel ashamed of having written them and as if I were a hypocrite.

(*Letters* 228)

ギヤスケルは作品が自分自身以上に善良で、偽善者であるかのように述べ、恥ずかしいとさえ感じている。ギヤスケルの作品が優等生のように善良になってしまうのはヴィクトリア朝時代の人々の反応を意識していたからであろう。『メアリ・バートン』や『ルース』のように大胆な題材を扱いつつも、ギヤスケルは絶望だけではなく、救いも描いている。ギヤスケルの主人公たちは、コミュニティの外に置かれていても社会に反抗したり、主張したりせず、自分の置かれた運命、立場を黙って耐え忍んでいる。すなわち、たとえ罪を犯したルースであっても、慎ましく健気に生きようとする姿に、読者も同情を寄せるようになり、最終的には受け入れてしまうのである。

ところがシャーロットが描く主人公は異なっている。『ルース』とほぼ同時期に書かれた『ヴィレット』(Villette, 1853)のルーシーについて考えてみよう。ルーシーは孤児であるということから、社会の中心にいる人物ではないが、ジェインとは違い、感情も出さずに自己主張もしない。またルースのような罪を犯したりもせず、自立を模索しながらひたむきに生きようとしている。それにもかかわらず、ルーシーはハリエット・マーティノー(Harriet Martineau, 1802-76)に酷評されたように(Allot 172-73)、ヴィクトリア朝時代の人々にとっては受け入れがたい人物である。なぜならルーシーは生涯に二人の男性に想いを寄せたからである。マーティノーにその点を指摘されたシャーロットは、女性も男性と同じように愛を感じて当然であり、愛とはどのようなものなのかよく知っていると反論している(Smith 3:118)。

シャーロットは読者が何を言おうと自己を主張しようとした。しかしギヤスケルにとって何よりも重要なことは、ヴィクトリア朝時代の読者に受け入れてもらうことであった。ギヤスケルは社会小説を通して、社会を変革したいという思いはあったかもしれないが、ヴィクトリア朝時代の規範や価値観から大きく逸脱することは免れたいと考えていたのであろう。このように女性として、作家として、シャーロットとギヤスケルは異なった価値観をもち、それらは彼女たちの作品にも色濃く投影されている。したがって献身的で女性らしいシャーロット像がギヤスケルの手によって作り出されたということは自然なことであったのである。

### 3 ギヤスケルの描くシャーロット像

対照的な価値観をもつ二人が『シャーロット・ブロンテの生涯』をとおして、描く者と描かれる者という立場になったということはたいへん興味ぶかいことである。前述したように、女性の幸福は家庭内天使として、よき妻、よき母であることだと考えていた。したがってそうしたギヤスケルの価値観が『シャーロット・ブロンテの生涯』にも反映されている。ギヤスケルは、シャーロットが子どものころに書いた初期作品についてあまり関心を示さず、シャーロットの作家としての経歴ではなく、家庭的側面にページのほとんどを割いているのである。

ギヤスケルがシャーロットの家庭的な女性らしい部分を強調しなければならなかったのには次のような理由があったことも確かである。シャーロットが亡くなってすぐに伝記を書こうとギヤスケルは決心していたが、偶然にも同じ頃シャーロットの父親もギヤスケルに娘の伝記を書いてもらいたいと考え始めていた。というのも、シャーロットが亡くなると、間違った情報が横行し、パトリック (Patrick Brontë, 1777-1861) はそうした記事に耐えかねていたからであった (Wise and Symington 4:190-91)。それゆえギヤスケルはパトリックの依頼をうけることによって、いっそうシャーロットの家庭的側面を強調し、シャーロットを聖女として描かなければならない使命を与えられることになったのである。

それでは、ギヤスケルがどのような手法を使ってシャーロットを献身的な「家庭内天使」として演出したかという問題について考察してみたい。その手始めとして、ギヤスケルはシャーロットがどれほど小柄であったかということを読者が具体的にイメージできるよう、エレンに宛てたシャーロットの手紙を活用した。

‘By the bye, I meant to ask you when you went to Leeds, to do a small errand for me. . . in case you chanced to be in any shop where the lace cloaks, both black and white, of which I spoke, were sold, to ask their price. . . I should like to see them; and also some chemisettes of small size, (the full woman’s size don’t fit me). . .’

(*Life* 444)

のちにシャーロットの夫となったニコルズ (Arthur Bell Nicholls, 1819-1906) はこのようなギヤスケルの手法についてどのように思ったであろうか。ニコルズは独

占欲が強く、結婚後、シャーロットがエレン (Ellen Nussey,1817-97) に出す手紙の内容にまで忠告を与えていた (Smith 3: 295)。それゆえ妻の下着まで明らかにされ、ニコルズの内心は穏やかではなかったと思われる。だがギヤスケルは表現のために手段を選ぶことはなかった。シャーロットが大人のサイズではなく、子ども用の下着を着ていたことまで明らかにしてしまったのである。

ギヤスケルはさらにシャーロットが異性にとって魅力がなかったわけではないということを示すために、4人の求婚者にまで言及している。名前こそ伏せてはいたが、シャーロットの周辺にいた人であれば、それが誰であるかはすぐに推測できた。シャーロットに求婚して拒否された男性のなかでも、スミス・エルダー社 (Smith Elder and Company) のジェイムズ・テイラー (James Taylor,1817-74) はとくにシャーロットが毛嫌いしていたことが暴露された。

‘Could I ever feel enough for —, to accept of him as a husband? Friendship? — gratitude — esteem — I have; but each moment he came near me, and that I could see his eyes fastened on me, my veins ran ice. . . .’ (*Life* 443)

彼自身はシャーロットに結婚を拒否されても、これほど自分が嫌われているとは思いませんでしたであろう。伝記が出版されたとき、彼はインドに赴任していたので、削除するようギヤスケルに求めたり、訴訟沙汰など起こしはしなかった。もし彼がイギリスに在住していたら、彼から第3版で削除や訂正するよう抗議が起きて不思議ではなかった。実はこれらの求婚者の暴露で、怒り心頭に発していたのは夫のニコルズであったかもしれない。ニコルズはもともとシャーロットのプライバシーを公表することに反対であった。父親のパトリックが積極的に伝記執筆をギヤスケルに依頼しようとしたので、渋々同意したのであった。ニコルズは、妻のシャーロットが亡くなって1か月後、ジェイムズ・テイラーがシャーロットに求婚したという証拠となるべきものを発見していたらしい。憤慨したニコルズはシャーロットの親友エレンにその真相を問い質そうと、ハワースからはるばるエレンの住むバーストールまでやって来た。エレンは折よく不在で、ニコルズに会うことはなかったが、その後エレンに対してのニコルズの態度は硬化していったのである (Whitehead 214)。

だが、ニコルズの想いとは裏腹に、シャーロットへの求婚者を明らかにすることで、読者はシャーロットが、異性にとって魅力のない余った女性ではなかったということを知ることになったのである。

ギヤスケルはさまざまな戦略を使い、シャーロットの粗野なイメージを払拭し、シャーロットを理想的な女性として描くことに成功した。しかしそれは、シャーロットの弁護にとどまらず、ギヤスケル自身の自己弁護ともなり、自己アピールともなったのである (Hughes and Lund 125)。

#### 4 社会小説としての『シャーロット・ブロンテの生涯』

ギヤスケルが伝記を描く当初の目的はシャーロットの歪められたイメージを修正することであったことはすでに述べたとおりである。しかし興味ぶかいことに、社会小説である『メアリ・バートン』や『ルース』と『シャーロット・ブロンテの生涯』には手法の点で共通しているところがある。たとえば『シャーロット・ブロンテの生涯』の冒頭と『メアリ・バートン』の冒頭は似ていると指摘されている (Miller 63)。ギヤスケルは『シャーロット・ブロンテの生涯』の冒頭でシャーロットの暗い人生を暗示するかのよう、孤立したハワースを描写しているが、『メアリ・バートン』の書き出しもまたマンチェスター (Manchester) の様子から始まっている。

類似している点はその冒頭部分だけではない。メアリ・バートン、ルース、シャーロットは家庭的で献身的な女性の典型として描かれているばかりか、純粹無垢な女性の代表として聖女の域にまで高められている。

さらにギヤスケルは、彼女たちの身の上にかかる事件や悲劇の源は彼女たち自身にあるのではなく、彼女たちを追いこんだ運命や環境にあるのだと暗示することによって彼女たちを弁護している。

『シャーロット・ブロンテの生涯』において、ギヤスケルはシャーロットが粗野で、下品であるのは彼女自身の生来の性格によるものではなく、悲惨な環境に起因しているとした。そのためギヤスケルはハワースの村人のエピソードを挙げて、シャーロットが育ったハワースという場所がいかに特殊なところであったかを強調した。また信頼できない情報源から集めたパトリックの奇癖を並べたて、シャーロットの風変わりな性格はこうした父親の影響であるととした。父親が悪人扱

いされればされるほど、読者はそのような残酷な父親に育てられたシャーロットに同情を寄せることとなったのである。

弟のブランウェル(Branwell Brontë,1817-48)もまたその犠牲となった一人であった。ギヤスケルはブランウェルがシャーロットを苦しめた原因の一つであるかのように、時間操作をして事実とは異なる描写をしている。ギヤスケルはシャーロットがつねにブリュッセル(Brussels)で憂鬱だったのは弟ブランウェルの放蕩癖に心を痛めたからだと述べたのである(*Life* 263)。ギヤスケルはシャーロットが留学していたブリュッセルを取材しようとして、エジェ塾(Pensionnat Heger)へわざわざ足を延ばしていた。ところがギヤスケルはエジェ夫人(Madame Zöe Claire Heger,1804-90)が面会してくれなかったことや、当時『ジェイン・エア』や『ヴィレット』がエジェ塾で読むことを禁止されていたことなどから、その事情を察することができた。シャーロットが妻子ある男性に想いを寄せていたという事実はギヤスケルが作り上げようとしていた女性らしいシャーロット像の妨げになるものであった。

それゆえギヤスケルは、ブランウェルの品行の悪さが彼女の頭を悩ませたとして、エジェ氏(Monsieur Constantin Geroges Romain Heger,1809-96)から読者の注意をそらすことにした。これは明らかにギヤスケルの情報操作であった。ブランウェルがアヘンや酒で身を持ち崩しブロンテ家の頭痛の種であったということは確かであるが、シャーロットがブリュッセルにいたとき、ブランウェルがシャーロットを悩ませるということとはなかった。彼が身の破滅をもたらすのはシャーロットがブリュッセルから戻ってからのことである。シャーロットを弁護するために父親パトリックを変人扱いしたのと同じ方法で、ギヤスケルはブランウェルを悪者として描いた。このように、ギヤスケルはメアリ・バートンやルースと同様に、シャーロットも彼女自身の罪ではないにもかかわらず、悲劇に追い込まれて行く姿を読者が同情を寄せるよう哀感たっぷりに描いたのである。

しかしシャーロットの悲劇はこれだけで終わらなかった。ニコルズと結婚したにもかかわらず、9か月後にはシャーロットは亡くなってしまふのである。『シャーロット・ブロンテの生涯』が『メアリ・バートン』や『ルース』と類似しているのは、『シャーロット・ブロンテの生涯』が伝記であるにもかかわらず、ユーグロウ(Jenny Uglow)が述べているように、シャーロットの人生そのものがギヤスケルの得意

とする小説のパターンに一致していたからである(399)。不幸にもシャーロットの生涯はまるで小説であるかのようにエンディングにおいて幸せな結婚から急激に悲劇的な死へと傾いて行く。ギヤスケルがシャーロットの結婚を幸福に描けば描くほど、その後続くシャーロットの死はいつそう、哀感迫るものとして読者に伝えられるのである。

これまで見てきたように『シャーロット・ブロンテの生涯』は、『メアリ・バートン』や『ルース』とさまざまな点において類似していることがわかる。ところが決定的に違う点はギヤスケルの意図である。『メアリ・バートン』や『ルース』は明らかに社会的、政治的意図をもって社会変革を唱えた社会小説であるが、『シャーロット・ブロンテの生涯』はギヤスケルがシャーロットを弁護しようとして描いた伝記である。ここで作者の意図ということが問題になる。かつて、作品は作者のものであり、読者のものではなかった。そのため読者はひたすら作者の意図は何なのか探ろうとした。ところが現代においてバルト(Roland Barthes)などの出現により、作品とテキストは区別され(92-3)、作品は作者のものだが、テキストは読者のものであると考えられるようになった。この現代文学理論に基づいて考えると、テキストは作者の下を離れ、自由に解釈することができる。またバルトなどの試みはテキストの解体であり、作者の意図の復元ではないのである。したがってこの理論にしたがうとすれば、『シャーロット・ブロンテの生涯』は伝記というジャンルに縛られることはなく、読み方は読者に委ねられている。

つまり『シャーロット・ブロンテの生涯』をシャーロット個人の経験を超えた、当時の中流階級の独身女性の物語として読めば、社会小説的側面が表れる。ギヤスケルが伝記で描いたように、家父長制度の下、当時の多くの中流階級の女性は家庭に閉じ込められ、女性らしく振舞うことを強要され、結婚するか、あるいは職業を持ったとしても家庭教師のような地位に甘んじるしかなかった。このように『シャーロット・ブロンテの生涯』に描かれたシャーロット像はヴィクトリア朝時代の中流階級の女性たちの体現でもあった。それゆえ『シャーロット・ブロンテの生涯』は伝記であるばかりか、中流階級の独身女性の窮状を訴える社会小説としての役割も担っていることになるのである。

## 5 おわりに

ギヤスケルは『シャーロット・ブロンテの生涯』を書くことで、伝記に新たな旋風を巻き起こした。伝記といえば、19世紀にはサミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles) の『エンジニアたちの生涯』 (*The Lives of Engineers*, 1861-62) に代表されるように、男性が男性の偉業をたたえるために描くものであった。ところがギヤスケルはシャーロットの作家としての偉業をたたえるのではなく、家庭的な部分を描いたことにより、女性が描く女性の伝記として新境地を開拓した。しかしそこに描かれていたのは決して新しい女性像ではなく、ヴィクトリア朝時代の因習にとらわれた旧態依然とした女性の生涯であった。それはまさにギヤスケル自身の理想の女性像でもあったのである。

1850年代、フェミニズムが騒がれ始め、新しい女性像を模索する人々がいる一方で、多くの読者は依然としてヴィクトリア朝時代の典型的な女性像を是とし、そこからまだ脱け出すことができないでいた。この伝記が当時の人々に支持されたのは、ギヤスケルがヴィクトリア朝時代の読者の反応に敏感で、彼らが何を求め、どこまで寛容であったかよく知っていたからである。

その後『シャーロット・ブロンテの生涯』は絶大な影響力を及ぼし、時代を経るごとにさまざまな読み方がなされてきた。出版直後、シャーロットこそ見習うべき理想的な女性の模範と見做され、女子教育においてもこの伝記は大いに役立った。しかし20世紀になりシャーロットのエジェ氏への手紙などが公表されると(1913)、ギヤスケルの伝記には書かれていない部分を研究したり、シャーロットの潜在的な心理を探る研究も登場している。このように『シャーロット・ブロンテの生涯』はギヤスケルの意図をこえて、時代とともに社会が変化していくなかで、多様な読みが可能となっている。

それゆえ、『シャーロット・ブロンテの生涯』を社会小説として読めば、テキストに新たな読みが加えられていくはずである。そして『シャーロット・ブロンテの生涯』というテキストは読者の読みによって解体され、無限に開かれていくのである。

## 注

本稿はエリザベス・ギヤスケル生誕200年記念、日本ギヤスケル協会第22回

大会(2010年10月3日、於実践女子大学)におけるシンポジウムでの発表「シャーロット・ブロンテとギヤスケル——女性、作家、友情」に、修正、加筆したものである。

- 1 バーカーはギヤスケルのテキストを見直し、さまざまな新事実を提示している。たとえばバーカーによれば、ハワースはギヤスケルが描いたほど、人里離れた寒村ではなかった(92)。

### 引用文献

- Allot, Milliam. ed. *The Brontës : The Critical Heritage*. London, 1974.
- Barker, Juliet. *The Brontës*. London: Weidenfield and Nicolson, 1994.
- Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Penguin, 1985.
- Chapple, John A. V. and Arthur Pollard. eds. *The Letters of Mrs Gaskell*. Manchester: Mandolin, 1997.
- Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Penguin, 1985.
- Hughes, Linda K. and Michael Lund. *Victorian Publishing and Mrs. Gaskell's Work*. Charlottesville and London: Virginia UP, 1999.
- Miller, Lucasta. *The Brontë Myth*. London: Vintage, 2002.
- Smith, Margaret. ed. *The Letters of Charlotte Brontë: Vol. Two 1848-1851*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- , ed. *The Letters of Charlotte Brontë: Vol. Three 1852-1855*. Oxford: Oxford UP, 2004.
- Uglow, Jenny. *Elizabeth Gaskell: A Habit Stories*, London: Faber and Faber, 1993.
- Whitehead, Barbara. *Charlotte Brontë and her 'dearest Nell.'* Otley: Smith Settle, 1993.
- Wise, Thomas J. and Alexander Symington. eds. *The Brontës: Their Lives and Friendships and Correspondence in Four Volumes*. Oxford: Blackwell, 1933.
- ロラン・バルト著 『言語のざわめき』花輪光訳、みすず書房、2000。

(静岡英和学院大学短期大学部現代コミュニケーション学科教授)

## Abstract

### Charlotte Brontë and Elizabeth Gaskell —*The Life of Charlotte Brontë* as a Social Problem Novel

Hisae ASHIZAWA

Gaskell, who has been deeply impressed by *Jane Eyre*, mentions her desire to meet the unknown author, Charlotte Brontë, in her letter. Gaskell's cherished wish to meet Charlotte is realized on 20 August 1850 at Briery Close. After this, an intimate and warm friendship grows up between them.

Despite the friendship, Charlotte and Gaskell have strongly contrasting views on politics, religion, and thought. Above all, what is remarkable is how they differ in their way of thinking on writers and women. Gaskell thinks that the most important part of women's lives is household duties. Charlotte, on the other hand, proposes the expansion of employment opportunities for women in her letter. Gaskell's mode of thought on women's role is assimilated into the Victorian ideal female. As a result, it is not surprising that Charlotte's image as a dutiful and self-sacrificing woman that Gaskell presents in *The Life of Charlotte Brontë* captures the Victorian readers' sympathy.

In addition, there is another reason why Gaskell describes Charlotte as such an 'angel in the house.' Patrick, who saw many false statements in articles after Charlotte's death, requested Gaskell to undertake the work of writing Charlotte's memoir to rectify the distorted image of a coarse Charlotte. Patrick's request assigned Gaskell the new task of defending Charlotte's life and works. Therefore, in *The Life of Charlotte Brontë*, Gaskell emphasizes Charlotte all the more as a dutiful and home-loving woman, exalting her domestic virtues, rather than as an admirable female writer.

However, Charlotte's self-sacrificing sufferings in the domestic life that Gaskell describes were also the same as those of many middle-class women in Victorian society. Accordingly, this paper examines the importance of *The Life of Charlotte Brontë* not only as a biography, but also as a social problem novel.

